

話 題

『 評 価 』 に つ い て

大 野 善 久 (原研)

JNDCニュースNo.21, 神田幸則氏の話題 —『いわゆる評価』について—を面白く拝見しました。「評価」という言葉は、科学技術の世界では以前にはあまり使われていなかったように思います。ところが最近色んなところで、色んな意味で使われるようになり、また一言に「評価」といっても、この文字から連想する具体的な内容は場合場合によつて、またその人の立場によつて、さまざまであろう。

シグマ委員会で「評価」という言葉を使いはじめたのは、そもそもがevaluationの日本語としてがはじまりであつたように小生は記憶しています。それならevaluationとは一体具体的な内容は何なのか？ これについても意見が分かれることであろうが、原点に返つて、Webster's New Collegiate Dictionaryの教示にしたがえば、evaluate ;

① to determine or fix the value of, ② to examine and judge の二通りの意味の存在が示されています。「評価」という言葉がevaluationの日本語として使われている限りでは、その意味する内容も、上記の二通りの意味が存在する筈で、まさに神田氏の指摘された、①計算をして値を求める、②内容の価値判断をする、の二種類の意味がそれぞれ対応しているものと思われます。

しかし、たとえ仮の呼称としても前者を実用型評価、後者を本格型評価と区別することは如何なものであろうか。文字にこだわるつもりは毛頭ないのだが、不思議なもので、一たび言葉が固定化すると、それから生れてくる内容についてのイメージは、これまた発案者の考えと全くいつてよいほど異つてしまつて、人さまざまな解釈が生れることがよくあるからです。

問題はevaluate (=評価する)の二通りの意味が、それぞれ独立して別々に存在するものとするか、あるいはその両者を統一的に考えるか、の差であつて、シグマ委員会の設立主旨はまさに後者の立場に立つていると私は考えます。神田氏は「以上2種類の評価、本格型および実用型評価はいずれも求めようとしている量は同じだが、その意図するところは別である」と述べておられますが、これはもうすこし厳密に表現して「……は同じだがその目的と方法が異なる」と考えれば当り前の話になるのではなからうか。あるいはそうしてしまうと神田氏の真意を誤解したことになるのだろうか。

いづれにしても核物理側からのアプローチ、炉物理側からのアプローチ、両者の長短あい補つて、一日も早く有効な核データの整備が行なわれることを希望したい。